

課題名	111 キウイフルーツの品質向上		分類	②
	1) エルノー液剤による新梢管理の省力化			
試験研究年次	62~1年(完了)			
I 目的				
生育調節剤の利用によって新梢管理の省力化を図る。				
II 試験方法				
1 供試品種	ヘイワード(10年生)、アボット(10年生、試験3)			
2 供試薬剤	エルノー液剤			
3 試験場所	場内及び現地(田川郡川崎町)			
4 試験区				
試験1 再発芽防止(昭62年、場内)				
(1)エルノー液剤1000ml/10a散布	62年6月17日に摘心、枝抜き等の新梢管理を行った直後に10a当たり100lの水量で茎葉に全面散布した。満開は5月26日。			
(2) " 500ml/10a散布				
(3) " 330ml/10a散布				
(4)無処理	1区1樹1反復(計2樹)			
試験2 伸長抑制(平1年、現地)				
(1)5月上旬667ml/10a (2)5月上旬1000ml/10a	平成1年5月2日、15日、24日、6月2日			
(3)5月中旬667ml/10a (4)5月下旬667ml/10a	200l/10aの水量で茎葉に全面散布した。満開は5月22日。			
(5)6月上旬667ml/10a (6)6月上旬500ml/10a				
(7)無処理	1区1樹1反復(計2樹)			
試験3 アボット果実浸漬(平1年、場内)				
(1)浸漬	1樹内に総ての区を設け、中庸な結果枝に着果した摘った果実を用いて満開33日後に200倍液に果実のみを浸漬した。1区20果反復なし。			
(2)無処理				
III 主要成果の概要				
1 新梢管理直後の処理によって副梢の発生が抑制された。抑制の強さは1000ml区=500ml区>330ml区であった。追熟果の果実品質には差が認められなかった。				
2 新梢は処理10日後に先端が褐変し、20日後には先端の2~3節が枯死脱落して伸長が抑制された。しかし、1000~667ml処理区では著しく副梢が発生して再び伸長した。6月上旬500ml区では副梢の発生は認められなかった。				
3 果実浸漬処理では処理区は無処理区に比べ果実肥大が劣り、収穫果の平均果重が3.5%小さかった。				
以上の結果、新梢伸長抑制及び副梢の発生抑制には、6月上旬以降のエルノー液剤500ml/10a散布が有効である。なお、果実肥大抑制を回避するため果実への薬剤付着量を減らすように散布する必要がある。				

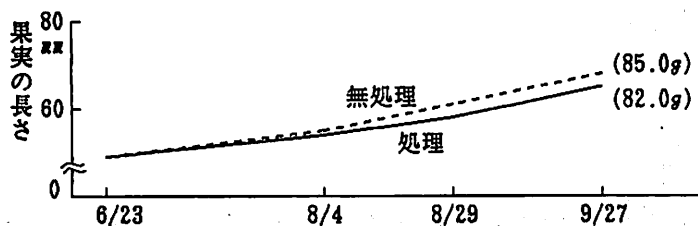
IV 主要成果の具体的データ

第1表 エルノー液剤散布による再発芽防止 (62年)

試験区	追熟果の果実品質			二次新梢発生率
	硬度	Brix	クエン酸	
1000ml/10a	5.7kg	15.6%	1.54%	22.3%
500ml/10a	5.7	15.6	1.38	23.8
330ml/10a	5.2	15.8	1.50	31.2
無処理	5.9	15.9	1.46	51.8
有意差	n.s	n.s	n.s	**

注)① 追熟果は11月25日に調査

注)② 二次新梢発生率は11月10日に調査



第1図 エルノー液剤の浸漬処理がアボットの果実肥大に及ぼす影響(平1年)

第2表 エルノー液剤の散布が新梢長、展葉数及び副梢の発生に及ぼす影響(平1年)

試験区		枝長(月/日)					葉数(月/日)					副梢発生率
		5/2	5/15	5/24	6/2	6/12	5/2	5/15	5/24	6/2	6/12	
5月上旬	667ml	43cm	54cm	55cm	55cm	56cm	12枚	13枚	14枚	14枚	14枚	25%
5月上旬	1000ml	47	51	54	57	59	14	14	13	14	14	68
5月中旬	667ml		67	79	81	83		16	17	16	16	47
5月下旬	667ml		78	97	109	112		16	19	19	20	11
6月上旬	667ml		69	79	87	96		16	17	17	18	68
6月上旬	500ml		71	82	86	88		16	17	17	17	0
無処理			72	102	120	130		17	19	20	20	16

注)副梢発生率は7月5日に調査した。

V 成果の評価と取扱上の留意点

- 1 キウイフルーツの新梢管理が省力化できる。
- 2 平成2年度登録予定

VI 今後の研究上の問題点

処理時期と果実肥大への影響

VII 資料名

昭和62年度～平成元年度福岡県農業総合試験場果樹関係試験成績書